
俺と彼女の電波的関係

神家シンジ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と彼女の電波的関係

【ZPDF】

Z6600S

【作者名】

神家シンジ

【あらすじ】

「突然だが、俺は恋をしている」
この物語は俺の一言から始まる
だが、俺の恋した美少女はちょっと痛い電波さんだった…

俺の恋と彼女の微妙な関係

「俺と彼女の電波的関係」

「突然だが俺は恋をしている!」

この物語は俺こと神地龍之介のこの一言から始まる

「ゴホ、ゴホ・・・マジかよ?お前が恋?」

こいつは俺の親友上影響・・・中学からの友達だ・・・

「冗談でこんなこと言つわけねえだろ!マジだよマジ大マジだ!」

と俺は少し目を細めて言つた

「でも、いきなり何でそんなことを言つてきたんだ?」

「だつてよおそろそろ高2の夏休み・・・彼女作るなら今つきやねえだろ?」

「まあ~そうかもな で、相手は誰なんだ教えるよ!」

と響は意地の悪い笑みを浮かべて聞いてきた

「ここまで言つて隠し通せるなんて思つちやいないよ!」

「さつすが龍だぜ!で、誰?」

「神宮寺真琴だ・・・」

俺はそつと響の耳元でつぶやいた

「マジか?よりにもよつて神宮寺かよ!?」

と大きな声で言つたため昼休みに教室で飯を食つてたクラスメイトほとんど全員振り返つた・・・神宮寺も・・・

「黙れつて!ちょ、みんなこいつち見てるじゃねえか!」

「おつとすまんすまん!ちょっと動搖しちまつてな・・・」

「いいじやねえか!神宮寺は成績優秀、容姿抜群おまけに性格もいいじゃねえか!響君これのどこに驚く要素があるんだね?」

俺は調子に乗つて(中二的なノリ)で尋ねた

「いや、別に、てか特には・・・」

「お~おい、歯切れ悪い言い方じやねえか!らしくねえぜ!」

「何でもねえよー。」

「そ、そつか?」

「俺は不満だったがそこで引き下がることにした

「でもよお、あの神宮寺と付き合つたりそれなりの覚悟がいるぜー。」

「なんでだよ・・・?」

「いや、少し昔の話になるんだが、中学の時色々問題起こす要素
「ははは、ないない、ないだろー! 神宮寺のどこに問題を起こす要素
「いだぜ・・・」
「あるんだ!」

「ま、信じたくねえならいしゃえー! ベ・ツ・ヒー。」

響はまたもや意地の悪そうな笑みを浮かべて言つた

「まあ~心の奥底にでも残しておくれよー。」

「そつしどけつて」

キーンゴーンカーンゴーン

「やべえ、授業開始だ! 急げ龍!」

「先行つてろー! 韶! 後ですぐ行くからー。」

「おうー! そつしどけつてもらうぜ! 遅れるなよ龍!」

とあわただしく会話をして響は理科室に向かつた

俺も急がなきややべえーな 教室には後俺だけ・・・か?いや、神
宮寺がいるじやねえか! もしこれがギャルゲーだったらとんだフラ
グだぜ! とりあえず声かけよ・・・

「神宮寺も急いだほうがいいぜー! それとも一緒に行くか?」

「急ぎはするけど一緒に行くのは全力で拒否させていただくわー!」

「そ、そうですか・・・」

俺の誘いをこうも簡単に・・・悔しいぜ・・・

「じゃあ先行くから・・・神宮寺も急げよー。」

「ええ・・・」

神宮寺真琴・・・容姿端麗才色兼備だつけ? でも、どこから見ても
きれいだよなあ~あの、サラツサラな黒髪そして豊満なボディ・・・
完璧だ・・・美しい・・・ってこんなこと考えてる暇じゃねえ! 急

がなきや！

俺は教室を後にして全力疾走で理科室へと向かつた・・・

俺の担任と親友(?)の関係

「よお！ 龍早かつたな！」

「ハアハア……」、この俺様にかかればこんな……距離一瞬で移動……できるぜ……！」

俺は息を切らしながら響に笑顔で言った

「その根拠のない自信まさしく中一病だな！」

「それって馬鹿にしてんのか？ それとも褒めてんのか？」

「どっちもだ！」

「そ、そ、う、か、？、？、？」

「龍そろそろ後ろ見たほうがいいと思うぜ……」

「え、何で……って先生じやねえか！」

「よお神地お前ら楽しそうだな！ 俺も混ぜてくれ！」

この人は俺らの担任兼理科の担当教師阿久津英人 筋骨隆々だつか？ とりあえずモリモリだ……なぜ、理科の教師になつたかは不明……保体の教師になればいいのに……

「で、何の話で盛り上がつてたんだ？」

と阿久津は笑顔で尋ねてきた……（逆に怖い……）

「龍之介の素晴らしい走りについてです……」

響はそう言い俺のほうを横目で見た……
「そ、う、か、あ、素晴らしい走りかあ、ぜひとも俺にも見せてほしいも、
ん、だ、な、！」

「また、機会があれば……」

俺は冗談を交えて言った……女子がクスクス笑っている……神富寺も……つて神富寺いねえじやねえか！

「どうしたんだ神地？ そんなに周りをキヨロキヨロして……発情期か？」

「発情期にそんな症状ねえだろ！」

と反射的に俺はつっこむ

「じゃあどうしたんだ？」

「別にどうもしてねえですよ」

「ほあ～そ～か・・・とつあえず授業を始めよっかー」

（どうしたんだ龍？）

と響が声をひそめて聞いてきた

（神富寺がいねえんだ！）

と俺は返す

「マジかよ！？」

響はまたも大きな声を出した

「うつせえよ！落ち着け！」

と俺も響に負けず劣らず大きな声で言つた

「俺から言わせてみればどうもひもつむさことと思つがなあ～」

「すいませんでしたー」（棒読み）

「うん？何だ？聞こえんぞ！」

くそつこの鬼畜教師が！

「もうしません！許してぐださーーー！」（全力ーーー）

「おお～やうか許してやらんでもないぞーーー！」

いや、許せよ・・・

「じゃあもうすんなよーーー」

「はあーーー」

（響、この話はまた後だ！OKか？）

（ああいいぜーーー）

と俺たちはアイコンタクトを交わし授業へと気持ちを向けた

キーンゴーンカーンゴーン

「じゃあここまで終わるか！」

阿久津はハリのある声で言つた

「起立、気をつけ、礼」

「おっしゃ、終わつたなーで、どうしたんだ龍？」

「さつきの授業神富寺がいなかつた・・・」

俺は響に言つた

「それは俺も確認した・・・お前最後まで教室にいたんだろ?」「いや、神宮寺もいた・・・」

「へえ～まあがんばれ!」

「軽いなあオイ!」

「だつて他人事じやんか!」

響はにやりと笑つてそう言つた

「そ、そうだけど・・・」

「がんばれよ龍!応援するぜ!」

「おしゃああ!神宮寺を俺が見つけてやるぜ!」

「そのいき・・・だ・・・?」

「ギャルゲーならば完璧な happy end のフラグだぜ!行つて
くる!」

「いや、すまん俺がお前をあおつたのが悪かった・・・戻つてこい
!」

「行かせてくれ!」のフラグを俺のものにするんだ!」「もしギャルゲーでもこれはフラグでもなんでもない!」

自信たっぷりに響は言つた

「な、なんでだよ・・・?」

「だつて教室にいるじやないか!神宮寺」

この時自分でも顔が赤面していくのを感じじる」ことができた・・・

じ、神宮寺が俺を・・・クスクスと笑つてゐる・・・

「うわあああああ!」

「おい、どうしたんだ龍?とりあえずー!」

俺は響の言葉を最後まで聞かず全力疾走した・・・田舎地はベラン
ダだ!

「おい!早まるな龍!」

この時点で俺はベランダの柵に足をかけていた

「つっせえ!死なせてくれ!これ以上俺のハート傷つけないでくれ
!」

「落ち着け!落ち着くんだ!ほら見ろ!」

響は何かを指さして言った

「え、何？」

その指の先にはクスクス笑つてゐる神宮寺がいた・・・またも笑われてゐるよし！死のう！

「ちくしょおー！はめやがつたな響！」

「さあ思う存分死んでこい！」

響は満面の笑みだ！どうやら俺らは親友じゃなかつたみたいだね！

「お前ららずいぶんと楽しそうだな！」

「うつせえ！楽しくなんかねえよ！・・・つて先生じやねえか！」

「終礼だ！」

と響は俺に笑顔で言った

「お前ら放課後職員室に来い！俺と共に青春の汗と涙を流そう！」

「俺もかよ！？」

響は驚いて聞き返す

「当たり前だ！神地にはゆつくりと人生相談してやる！」

「暑苦しそうなんで全力で拒否させていただきます！」

「そう言うな！俺はお前の素晴らしい走りとやらをビデオに収めてネットに投稿するだけだ！」

「あんたは教師失格だ！」

俺は全力でつっこんだ！

「とりあえず座れ！」

「はあ～い」

全てが終わつたような氣がするぜ・・・

俺の妄想と妹の関係

「で、何で飛び降りようとしたんだ？」

放課後俺たちは阿久津に言われた通り職員室にいた

「た、ただのパフォーマンスですよ！ホントに飛び降りようなんてしてません！な、響？」

「こいつなんだか女子に笑われたのがショックだったみたいで・・・

「つぐ、やはり響てめえとはいはずれ決着をつける時が来そうだな・・・

「ほお～そ～うかやはり青春だな！俺も高校の時は・・・（以下略）」「（響てめえが余計なこと言つから長くなつちまつただろうが！）（今回は反省するぜ・・・）

・・・1時間後・・・

「彼女はこう言つたんだあなたしか愛せませんつて！」

「「へ、へえ～す～いですね～」」

俺たちは阿久津の話により心身ともに極限まで追い詰められていた・

・・・

く、くそここまでエロを削られるとは・・・せ、さすが阿久津だぜ・

・・・

「とこ～うわけだつたんだ！～じつしたんだお前ら？そんなに疲れた顔して！」

「「ああ～だ、大丈夫つすよ」」

と俺と響は一音一句違わずに言つた

「ほお～そ～うか！もうこんな時間だな帰つていいぞ！」

「あざつす！」（響）

「どうもです～！」（俺）

「おう～じゃあな！」

と阿久津のハリのある声を背中に俺たちは職員室を後にした

「なあ～龍明日、日曜だしどうか遊びに行かね？」
響が能天気に言った

「おいおい、何でこいつこんなに元気なんだ？ＨＰ何万だよ？」

「行かねえのか？」

「あ、どっちでもいいぜ・・・」

「おっしゃ決まり！で、ど〜行く？」

「ど〜でも好きなところに行きなさいー。」

「じゃあ神宮寺の家でも行くか？」

「ドサツ」（俺が極度の緊張により倒れた音）

「ガツ」（それを響が起こした音）

「じょ、冗談でも言つていい冗談と言つちゃいけない冗談があるって小学校の先生に習わなかつたか？ドアホ！」

「いやあ～そこまで動搖するとは思わなくてよお～」

響はすまなそうに笑つて言つた

「まあ～メールでもしろよそれで決めよー。」

「ああそうだなーじゃあな龍！」

「おう！」

と響を見送り走つて家に帰つた空には星がきれいに輝いていた・・・

（で、どこ行くよ？）（響）

（あ？知らねえよー）（俺）

これと同じメールのやり取りを俺たちは一時間以上にわたつてしていた、

（だから、どこ行くんだよ龍ー。）（響）

（そんなこと俺に聞くなー言つてきたお前がき・め・りーー。）（俺）

（じゃあ神宮寺の家にでも・・・。）（響）

神宮寺の家・・・淡い妄想が脳裏をよぎる・・・でつかい和風のうち・・・そこにいる神宮寺・・・厳格な父に優しい母・・・なん

て理想的な家なんだ・・・the日本の家族！

ツハ！現実世界に戻つてこねば！やばいやばい危うく昇天してしま
うところだった・・・

「オイ！兄貴変な呻き声上げんな！」

と言つて妹の涼子がドアを蹴つて部屋に押し入つてきた
「何！？俺は呻き声を上げてたのか？」

「真琴がどうとか・・・the日本の家族がどうたら・・・

「とりあえず忘れてくれ！」

「私も忘れたいから・・・」

物わかりのいい妹だ！助かるぜ！

「ありがとうわが妹よ！恩に着るぜ！」

「うわ、キツモ！近寄らないで！」

「近寄つてねえしここは俺の部屋だ！」

「一つだけ聞きたいんだけど・・・何でそんな顔赤いの？」

「その質問にはお答え出来ません！」

「分かりましたよ！出でいきますよ！じゃあな馬鹿兄貴！」

「うつせ！誰が馬鹿兄貴だ！とりあえず学年2位の学力を誇る男だ
ぞ！」

バタンッ

大きな音を立ててドアが閉められた

この間にも響からメールが送られてきていた・・・

2分前

（大丈夫か？また倒れてねえか？）（響）

1分30秒前

（仕方ないが、神富寺の家に行くことにじよつ・・・）

1分前

（俺はお前の恋を応援するぜ！当たつて碎けて死んじまえ！）

そして現在

（僕キミとちやんと話したいな！用件は何なの？）（俺）

（死んじまえ（笑）（響）

(今からでめえを地獄の淵にたたき落としてやんよ……) (俺)

(明日9時に駅前な!) (響)

(後十数時間がでめえの余命だ! 楽しみに待つとけ!) 俺

ここで俺は携帯の電源を切った

神宮寺の家か……楽しみのよつな……恥ずかしいよつな……
まあ寝るか……

「ガンガン! ガンガン!」 (隣室の大音量のステレオの音)

「ハハハハ! !」 (1階でテレビを見ているおふくろが笑う声)

「…………」 (俺の声にならない叫び)

「うつうつせえんだよ……」

とつあえず手始めに涼子から……

そう考え俺は妹の部屋に殴りこみ

「黙れ! 消えろ! 死ね!」

「はあ……?」

「もう一度言つてやるうつか? うつせえんだよ……」

久々に俺はマジギレした

「…………すいません……」

素直な妹だ……よし、戦利品でも持ち帰るか……

「ちよ、兄貴何してんの? ステレオとつちやだめ!」

「冗談だよ……」

「目がマジで怖いだけど……」

1人片づけた……次はおふくろか……

俺はものすごい勢いで階段を駆け降りた

「龍ちゃんどうしたの~?」

おふくろは不思議そうに俺に訪ねてきた

「だ・ま・れ!」

「ええ~何にもしゃべってないじゃん!」

「テレビ消せよ!」

「何で?」

「うつせんだよ! 俺もう寝たいんだ!」

「じゃあ音ちりちやくするね・・・」

「そうしろ!」

階段を駆け上がり俺はベッドに入った

(午後11時40分就寝)

俺の遅刻と彼女の電波的関係

まずつた・・・8時45分だ・・・急いでも駅まで20分はかかる
ぞ・・・つべどあれば・・・しゃあーねえあれやるか・・・

「艦かせんおせむーー。」せんで来てねよ

龍丸やんおほしにこほんで来て
ペバーフラウのうかうかは二言つ

「サボーナはおらんが、おれに仕一體か

必殺「おふくろの言葉なんて耳に入つてないよ!」だ

無視して俺は出かけた・・・

「うへへ無理なのが・・・やまつじのスペードじゅう二二、せじアーペーじゅう二二、

三三

8時59分駅前に到着！

くそ、電話するか・・・ええ、つとこれが・・・

（おかげになつた電話番号は現在使われておりません……）

急いで気づかなかつたけど・・・俺の寝た後メール来てんじやん・

卷之三

（嘘）おまえんちなー！ 9時集合場所変える、場所はおまえんちなー！

半に行くからー！（一）（響）

やつとは決着をつけねばならんな・・・とりあえず戻るか・・・俺は全速力でペダルをこぎ家に戻った

9時20分自宅着！

まだ10分あるな・・・どうでもいいが、腹減った・・・

「よお龍俺を待つててくれたのか？」

「つこつ時に限つてこいつ来るの異様に早いな・・・きつといやがらせなんだろう・・・

「響か・・・で、どこ行くんだ・・・？」

「神宮寺の家！」

バタッ・・・

「大丈夫か龍？」

「響 我が人生に一片の悔い・・・な・・・し」

「りゅ――――う！」

「朝から何男一人で抱き合つてゐるの? 気色悪いよ・・・」

「おお～涼子ちゃん! 久々」

「そうだね・・・で、何でうちの兄貴は倒れてるの?」

「ああこれはじん！」

響がここまで言つたところで、響の口に手をつっこみなんとか防ぐことに成功した

「じん何?」

「神社巡りしたいなあ～って思つたんだよ」

俺は白々しく続ける

「へえ・・・そう」

そう言つて妹は俺をにらみつける

「お前はどうか行くのか?」

「ひ・み・つ！」

「ふ～んあつそ! 興味ねえよ!」

「バイバイ! 道の真ん中で抱き合つてるとキモいよ!」

と言い残し妹は走り去つて行つた

「じゃあそろそろ行くか!」

響はそう言つて立ち上がつた

「ま、マジ? まだ心の準備が・・・」

「

「当たつて碎けて死んじまえ！」

「とりあえず手始めにてめえを殺してやんよーーー！」

と悪役のようなセリフを吐き俺は響に襲いかかつた

「そんなことするんだつたら、教えてやんねえぜ！」

意地の悪い笑みを浮かべて響はそう言った

「その手にはのらないぜ・・・すいませんでした！」

襲いかからうとするのに体が動かない、どうやら体は正直みたいだ・

・

「よつしや行くか！」

「おう！」

道の真ん中で大声をあげる俺たちを道行く人々が見る・・・だが、
気にならない

「てなわけでこれ地図な！」

「？？？」

「俺行かないから一人で行つて来い！」

バタンッ

「落ち着け！大丈夫だ！氣をしつかり持て！」

「そ、そうか・・・？」

少し頭がクラクラする・・・

淡い妄想が止まらない・・・神宮寺・・・これがきっかけで付き合つちゃつたり・・・ 真琴とか龍ちゃんとか呼び合つたりしちゃつて・・・

「オイ！龍戻つてこい！カムバツク現実世界へ！」

「ツハ！俺は何を・・・？」

「よだれ垂らしながらニヤニヤしてたぞ！真琴・・・真琴・・・つてつぶやいてたし・・・

「そ、そんなことを・・・」

はたから見れば不審者です！

「じゃあ行つて来い！健闘を祈るぞ！」

「お、おう！」

俺たちは手を握り合つて健闘を祈つた

「じゃあ行つてくるぜ！！」

「じゃあな龍！」

俺は響に背を向け走つてその場を去つた・・・

午前10時7分いざ出陣！

なかなか遠いな・・・神富寺の家・・・電車使つか?いやいや、金
がもつたない・・・

このチャリを使うしかないのか・・・

出陣から30分俺はまだ神富寺の家にたどり着けないでいた・・・

は、腹減つた・・・

朝飯を食つていないせいか無性に腹が減つた

くつ、駅前で何か食つか・・・

「うん？あれなんだ？」

数百メートル先に女子が見える

「ゴスロリファッショソかあ～よくあんなん着て恥ずかし・・・く・

・・?」

そこで俺は言葉を見失つたその女子に見覚えがあつたのである・・・
いや、見覚えなんてものではない、いつも俺が教室で姿を見るいや
むしろ姿を追つている

そう・・・神富寺真琴だつたのだ・・・

この時を境に少々慌ただしく俺と彼女の関係が変わつてくるのだが、
俺はまだその時は知る由もなかつた・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6600s/>

俺と彼女の電波的関係

2011年10月8日13時59分発行